

ジャクソンヴィルにおける南方熊楠

松 居 竜 五*

Minakata Kumagusu in Jacksonville

Ryugo Matsui*

Minakata Kumagusu (1867-1941) did a research trip on tropical botany in Florida and Cuba from 1891 to 1892. He stayed in Jacksonville for about one year before and after his voyage to Cuba. He made many botanical discoveries there including several new species of lichen in collaboration with an amateur botanist W.W.Calkins. At the same time, he made friends with Chinese immigrants in Jacksonville, which opened his perspective to the multicultural world far from the closed Japanese society he used to live in before this trip. Such experiences in academics and daily life are thought to have inspired Minakata's philosophy of comparative culture in the later years.

1 熊楠のフロリダ・キューバ行き

思想家としての南方熊楠 (1867—1941) の特徴の一つは、彼が若い時期を海外での放浪に費やしたことにある。19歳で渡米し、33歳で英国から帰国するまで、熊楠は実に14年近くにわたって、海外での生活を続けている。

その中でも、もっとも波瀾万丈であったのが、1891年、24歳の時から翌年にかけてのフロリダ・キューバ旅行である。サンフランシスコではビジネスカレッジ、ランシングでは農学校に所属した熊楠は、1888年から1891年の間は主にアナーバーに滞在し、独学の生活を続けた。熊楠は、その間もミシガン大学に通う数十名の日本人留学生と交流し、日本社会の延長の中で過ごしていた。しかし、1891年5月に突然、この日本人社会と決別して南に向かい、単独でほとんど他の日本人が踏み行ったことのないような地域での「冒険」をおこなったのである。

熊楠がこうした旅行を志した理由は、主に植物学の調査のためであった。アナーバー時代の熊楠はシカゴのアマチュア植物学者ウィリアム・カルキンスと文通し、当時隠花植物と呼ばれていたシダやコケ、地衣類の研究に興味を抱いていた。そして、カルキンスからフロリダがこうした隠花植物の採集のための恰好の地であることを知らされたのであった。そのようにして向かったフロリダ半島でもキューバでも、熊楠は精力的に植物採集を敢行し、新種の地衣と判断されたギアレクタ・クバーナを含む重要な発見を成し遂げている。

一方で、この時の「冒険」旅行から熊楠が得たものは、植物調査だけではない。フロリダ北西の都市ジャクソンヴィルで一年を過ごした熊楠は、中国人の家に下宿し、彼らのコミュニティの中で暮らすこととなった。また、キューバではサーカス団の日本人の団員と交流を持っている。東京、

* 龍谷大学国際文化学部

サンフランシスコ、ランシング、アナーバーと、常に同年輩の日本人とのつきあいの中で生活していた熊楠にとって、この24歳から25歳にかけての日々は、新たな世界へと向かう旅だったと言えることができるだろう。

しかし、このフロリダ・キューバ期の熊楠の実像を知るための資料は、決して多くはない。以前は、帰国後の熊楠がホラ話として語ったことが尾ひれをつけて喧伝されており、キューバで独立戦争に参加して盲管銃創を受けたとか、サーカス団に入って西インド諸島をめぐったといった「伝説」がそのまま踏襲されていた。その後、日記や友人宛の手紙が公開されることで、こうした虚構は払拭されていったが、情報源としては依然として不足している部分が多い。

こうした状況を踏まえて、筆者は2008年3月にジャクソンヴィルおよびマイアミで調査をおこない、その後も文献などで周辺の資料を収集した。その結果、これまでわかっていたことに加えて、新たな発見があったので、そうした情報を加えながら、今回は熊楠のジャクソンヴィルでの滞在について再構成を試みたいと思う。

2 カルキンスとの交流

シカゴのアマチュア植物学者のウィリアム・W・カルキンス(William Wirt Calkins, 1842—1914)と熊楠の交流が始まったのは、アナーバー滞在期の終わり頃の1890年のことだったようである。カルキンスは南北戦争に法律を学んで弁護士となった人物で、シカゴに事務所を構えて年金や行政訴訟を専門に活動していた¹⁾。少年時代から自然科学を愛好して岩石や化石を集め始め、貝類を研究していくつかの論文を執筆している。顕花植物、菌類なども多くの採集を残したが、後年はおっぱら地衣類の研究をしていた²⁾。

熊楠と文通を始めたきっかけは不明である。この時、カルキンスは50歳前後で、しばしば冬の保養も兼ねて、テキサスやフロリダに採集旅行に出かけていた。「フロリダで地衣類を集むるカルキンス大佐と文通上の知人となり、フロリダには当時米国学者の知らざる植物多きをたしかめたる上、明治二十三年フロリダにゆき、……³⁾」という熊楠の後年の述懐からは、彼との関わりがフロリダ行きの大きな理由であったことが示されている。

カルキンスから熊楠への手紙は、和歌山県田辺市の南方熊楠顕彰館に9通分(うち1通は封筒のみ)が残されており、今回の研究ではこれらの翻刻をおこなった。また、当時の日記にはひんぱんにカルキンスとの交流の跡が記されているので、これらの記述に関する時系列順の表を作ってみた。この表からは、おそらく熊楠とカルキンスの手紙は全部で20往復程度あったと推測されるので、現存しているのは数的には約半分と考えられる。ここでは、これらの書簡や日記からわかることを紹介してみたい。まず、現存する最初の手紙は、熊楠がアナーバーを出発する直前の4月21日のものであるが、その冒頭でカルキンスは次のように書いている。

あなたからの手紙をたった今受け取り、事故により計画を変更せざるを得なくなったことを理解しました。あなたがすでにすっかり良くなって、旅行を再開できるようになっていることを祈ります。フロリダにいる間にあなたと会えないことはたいへん残念でしたが、旅程の中で私に会いに当地に立ち寄ってください。

この文章からは、カルキンスがフロリダにいた間に、熊楠が彼を訪れに行くという計画があったことを示している。ここで言う「事故 (accident)」が何を指しているかははっきりとはわからない。この手紙で、カルキンスはまた、シカゴの自宅への道順を記しており、熊楠の来訪を期待していたようである。

3 ジャクソンヴィルと火事

しかし、熊楠はシカゴに立ち寄ることはなかった。1891年4月29日午後9時45分にアナーバーの駅を出発し、乗換駅のトレドで一泊した後に、西にあるシカゴには向かわずに、そのままオハイオ州を南下し、夕方にシンシナティに着いている。そこから、5月1日にはテネシー州に入り、ナッシュヴィル、モンゴメリーを経由。5月2日によくジャクソンヴィルに着いた。3日がかりの旅行であった。

ジャクソンヴィルはフロリダ州の北西の隅にあり、セント・ジェームズ川の河口に沿ってできた町である。当時の人口は2万5千人で、フロリダ州の商業の拠点として繁栄していた。熊楠は着いた日の日記に「朝九時頃ウェイロックにて換車、午後一時頃ジャクソンヴィルに着、デューヴァルハウスに宿」と書いている。このデューヴァル・ハウス Duval House とは、このあたりの地区の呼称であるデューヴァル・カウンティから名前を取ったホテルで、フォーサイス Forsyth と Hogan の二つの大通りの交差点にあった。駅からほど近い場所であったことも、熊楠がここに宿泊した理由であろう。

しかし、翌日には熊楠は「デューヴァルハウス今日限り閉館（これは毎年五月になれば来客少くなる故なり、十月に至れば開くことの由）」と書いており、ウェスト・アヴェニュー第四百七番⁴⁾に移動することになった。実は、この建物は1892年に火事で焼け、翌年立て替えられてニュー・デューヴァル・ホテルとして営業を再開した⁵⁾。新しい建物の写真は残されているが、熊楠が泊まった当時の姿は、ガイドブックに小さな挿絵（図1）が残されているのを見ただけである。



図1 熊楠が泊まったデューヴァル・ハウス⁶⁾

この頃のアメリカの都市はどこもそうだが、ジャクソンヴィルは火事の多い街であった。熊楠が滞在している間にもよく起きており、1891年5月20日には「今朝飯後郵便局に行けば、局及其比屋の高廈八棟ほど焼失、局員は其後の牛肉店の内にて事務扱ひおれり。一昨夜焼失とのこと、火は未だ燃おれり」というような状況であったという。

さらに大火事だったのは同じ年の8月17日に起きたもので、熊楠は「此夜十一時過より市中に火事あり。三時間斗り焼中ダイナマイト破裂、景色殊にすさまじ。暁に至て火なお消ず、所焼五街、市中諸処の硝子、右ダイナマイトの為に震裂せり」と記録している。『フロリダ州ジャクソンヴィルの歴史⁷⁾』によれば、この時の火事は「午前0時5分前にベイ・ストリートの陶器会社から出火した」もので、メイン・ストリート沿いに一気に広がった。1時45分にスミス・ビルに達した際に、蓄えてあったダイナマイトに引火したという。

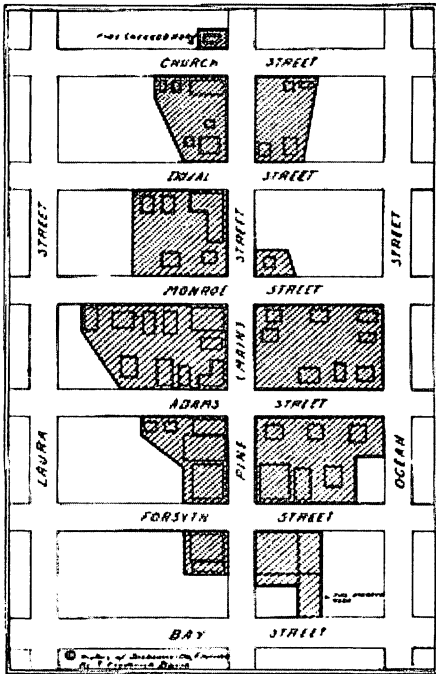


図2 熊楠が目撃した1891年8月17日の火事の状況。網線部が焼けた箇所。この地図での一番上がチャーチ通りで、後述の江聖聡の店は地図の左端からさらに二ブロック行ったところ。下から二番目のフォーサイス通りの左端から一ブロック行ったところにデュヴァル・ハウス。また一番下がベイ通り。

実は、熊楠が街を去った8年後の1901年8月に、ジャクソンヴィルでは決定的な大火災が起きている。この時の火事後の街を写真で見ると、まるで大空襲の後のように焼け野原になっており、中心部のほとんどの建物がなくなっている。現在のジャクソンヴィルはこの大火災の後に再建されたものであり、したがって街の雰囲気は熊楠の頃とは一変していると考えられる。街に関するさまざまな資料もこの時に焼失していて、熊楠の時代の調査にはそうした困難が伴っている。逆に言えば、かなり詳細につけられた熊楠の日記は、そうした意味では大火以前のジャクソンヴィルの歴史を知る上でも貴重な残存資料の一つと言えるかもしれない。

4 ギアレクタ・クバーナの発見

さて、ジャクソンヴィルに着いてからの熊楠は、周辺の森林などで精力的に地衣類の採集をおこなった。3日目の5月5日にはカルキンスに手紙を書いており、3か月間の滞在中に何度かやりとりがなされている。その後、ジャクソンヴィルを8月18日に出発した熊楠は、フロリダ半島をさらに南下し、21日には最南端のキーウエストに着いた。現在、顕彰館には、熊楠がキーウエストでカルキンス宛に書こうとした手紙の下書きが残されているが、そこにはフロリダの植物の種類が多いことに対する驚きが記されている。

この前後に、熊楠はキーウエストからシカゴのカルキンスに宛てて、自分が採集した標本を送っているようである。その中には、背の高い柱サボテンの茎についた地衣があり、これはカルキンスにも正体がわからなかった⁸⁾。そこで、地衣類の権威であるウィリアム・ニランデル (William Nylander, 1822—1899) にこれを送ったことが、1891年10月9日付けの来簡から読み取れる。ニランデルはフィンランド人で、ヘルシンキ大学で教えた後、1863年からはパリに住んでいた。1890年には日本産地衣類に関する本も書いていて、ニランデルはこの本をカルキンスに贈っていた。実は、

熊楠はカルキンスからこの本を借りて、旅先で読んでいたようである。

さて、熊楠は9月15日にキーウエスト発の船に乗り、翌朝キューバのハヴァナに着いている。ここでも熊楠は精力的に植物採集を続け、地衣類だけでなく、顕花植物、シダ、コケ、菌類なども採っている。また、珍しい熱帯の生物に心引かれたためか、クモや昆虫、トカゲ、両生類まで採集し、「動物総計九十三種」（11月26日の日記）と記している。これらの成果を携えて、熊楠は翌年1月9日にまたジャクソンヴィルに戻っている。

その一方でこの時期の熊楠は、どうやら体調がすぐれなかったようである。「当地は熱きこと連雀町の火事を万世橋で見るごとく、小生は日々裸かに御座候⁹⁾」という暑さのせいだったかもしれない。ジャクソンヴィル滞在期の後半には、熊楠は渡英の計画を立て始めるが、一時はそれを断念して帰国しようとさえ考えたことがあったようである¹⁰⁾。カルキンスからの手紙にも「ご健康はいかがですか」（1892年1月22日）や、「すでに回復されているとよいのですが」（1892年4月18日）などの言葉が見え、熊楠からの連絡を受けて心配していた様子がわかる。

カルキンスはまた、熊楠のキューバ滞在の最後の月にあたる12月には資金を用立ててくれている。この前後には、熊楠は友人の小手川と蓑田からも金を受け取っており、キューバからジャクソンヴィルまで帰る費用を工面していたのかもしれない。ジャクソンヴィルに戻った1月19日には、20ドルをカルキンスに返却しているが、これに対してカルキンスは、「残額は急がなくともよい」という返事を出しており、まだ借金が残っていたようである。

カルキンスと熊楠との植物学上の交友関係のハイライトは、新種の地衣の発見である。熊楠がキューバで採集した地衣を、カルキンスはニランデルに送り、これは新種と同定された。ニランデルはこの標本にギアレクタ・クバーナ *Gyalecta cubana*, Nyl. と名前をつけている。1892年4月18日消印のカルキンスからの来簡は、第一報を以下のように伝えている。

親愛なる南方氏へ。私はたった今、ニランデル博士から手紙を受け取りました。あなたが私にキューバから送ってくれた標本2を新種のギアレクタ・クバーナと名付けたそうです。私は、発見者はあなたであり、その正式な権利はあなたにあると書いておきました。

さらに、1893年3月21日付けの手紙で、カルキンスは「あなたが2と番号を振ったピンク色の子実体を持つ石灰質の地衣がギアレクタ・クバーナです」と確認している。これは後に熊楠が「キューバにて小生発見せし地衣に、仏国のニイランデーがギアレクタ・クバーナと命名せしものあり。これ東洋人が白人領地内において最初の植物発見なり¹¹⁾」と誇るものであった。

ただし、この旅行で熊楠が発見した新発見の地衣はギアレクタ・クバーナだけではない。ロンドン到着後の1892年11月24日の熊楠の日記には「n.7 *Lecanaetis floridensis* Nyl. n.12 *Stigmatidium negro-cinctulum* Nyl. 此二種予キウエストにてとる所新種也。米国カルキンス氏より通知さる」とあり、キーウエストで採集した二種もまた新種と判断されたことがわかるのである。

しかし、その一方でこれらの「新種」をニランデルが何らかのかたちで学会に発表したかどうかの確証はなく、熊楠のフロリダ、キューバでの発見はあくまで非公式のものという可能性が高いことには留意しておかなければならない。

5 ジャクソンヴィルの中国人社会とのつきあい

フロリダ・キューバ時代の熊楠を学問の面で支えたのがカルキンスであったとすれば、生活面で大きな恩恵を与えたのは、ジャクソンヴィルの中国人たちであった。熊楠はすでに日本からアメリカに渡る船の中でも中国人と交流し、サンフランシスコ、アナーバーでも中国人の料理店などにしばしば立ち寄っていた。しかし、米国在住の中国人社会にどっぷりと浸ることになったのは、ジャクソンヴィル滞在中のことである。

まず、ジャクソンヴィル到着後一月を経過した6月3日の日記には「夜支那人梅彬廼方にて酒のむ。水滸伝二冊借て帰り読み、暁に徹す」とあり、これが同地の中国人について記述した初めである。この後、「終日支那人梅彬廼方に在り、夜宿る。米飯にて饗せらる」（6月19日）、「夜支那人方に火酒をもらふ」（6月24日）、「夜支那梅彬廼方に鼓弓三弦の合奏を聞く」（6月25日）、「夜支那人劉炎方に飯を饗せらる。香羹、石決明有り」（6月27日）、「夜梅彬廼及仏国女と麦酒九本のむ。梅方に宿す」（6月29日）と急速に馴染みになっていることがわかる。

熊楠が最初に知り合ったこの梅彬廼という男は、ジャクソンヴィルの中国人社会の顔役であったようである。8月9日には「夜支那人梅彬廼方に博徒^{ばんし}至、余酒をふれまふ。彼輩、楊樂、楊牛、司徒麟、陳開葉、江聖聰、凌□、趙炎、趙宇、趙針等凡十五人」と、梅が主催する賭博会が開かれている。また、「支那人梅彬廼より、五連発ピストル一個及弾丸十余個五弗にて購収」（8月12日）と、キューバに向かう熊楠にピストルを調達することもできた。「夜梅彬廼及仏国女と麦酒九本のむ」（6月29日）の中のフランス女性は梅と何らかの関係を持つ娼婦であったかもしれない。

この頃のアメリカにおける中国人たちの中には、洪門会や天地会、三合会などと呼ばれた秘密結社と関わりを持っていた者が多い。こうした秘密結社は、反清復明運動に端を発するもので、殺人、麻薬、売春、賭博などを請け負う犯罪組織としての面もあるが、海外での中国人の生活を支える互助会的な側面も持っていたと考えられる。これらの秘密結社では入会における誓約が重んじられ、構成員同士が義兄弟としてのつよいきずなで結びついていることが大きな特徴であった¹²⁾。

その一方で、洪門会のような大きな組織に属さない小規模の中国コミュニティは、こうした秘密結社の形式にのっとり「堂 tong」と呼ばれる小組織を作る傾向もあったと言われている。たとえば、ウィキペディアの英語版では、「堂」は次のように紹介されている。

Some of the first tongs formed in the second half of the 19th century among the earliest immigrant *Chinese American* communities. Many were outcasts or lacked the clan or family ties to join more prestigious Chinese surname associations, business guilds, or legitimate enterprises. As a result, they banded together to form their own secret societies for protection. These first tongs followed the same patterns as the triads.

初期の「堂」は、19世紀の後半に初めてアメリカにやって来た中国移民のコミュニティの中に形成された。その多くはもっと立派な中国系の組織や商売仲間や合法的な会社に属している親戚や家族を持たない者や流れ者であった。結果的に、彼らはともに自衛のために自前の秘密結社を組むこととなった。こうした初期の「堂」は、三合会などと同じやり方を踏襲した¹³⁾。

つまり、この頃のアメリカには、三合会のような大きな勢力を本格的な組織から、そのやり方をまねた地方の自前の組織である堂まで、さまざまな秘密結社のネットワークがあったと考えられる。大陸横断鉄道の建設などのために大量の中国人が移民労働者として渡米したものの、西海岸では白人優先の当時のアメリカ社会からたいへんな迫害を受け、1882年には中国人移民禁止法が成立していた時期のことである。中国人たちは、自衛のためにも擬似家族的なつながりをいっそう強める必要があったのだろう。

こうした在米中国人の秘密結社化という社会的背景は、熊楠がつきあったジャクソンヴィルの中国人社会を考える上で重要な要素である。熊楠が「博徒」と呼ぶこれらの中国人は、ニワトリの頭を断って、それを投げつけて誓言をすることもあったという。また、彼らの愛読書が『水滸伝』であったということも、反清復明のための梁山泊という自己認識を持っていた秘密結社の方向性と合致するものであったと思われる。

たとえば、熊楠は7月31日の日記に「此日チャーレストンより 姓の支那人一人来る。シカゴ府に在し後、十三ヶ月前チャーレストンに転じたるが、猶子を尋ね来れる也」と書いている。この「猶子」とは、明治以前の日本の習慣で、血縁関係のない者が擬制的に親子関係を誓うやり方のことである。これなども、家族関係を擬した中国人秘密結社のネットワークのあり方を思わせるような記録であると言えるだろう。

一方、ジャクソンヴィルの移民に関してまとめたコーエンによれば、この時期、中国人の排斥運動が激しかった西海岸と異なり、南部では中国人は黒人に代わる労働力として期待されていた。そして、一般的に南部ではチャイナ・タウンを形成せずに、ばらばらに住む傾向があったと言う¹⁴⁾。コーエンは「親族集団や、言語的なつながり、秘密結社、寺院は南部にはなかった。これらの組織は北部や西部では隆盛であったが、中国人がばらばらにちらばっている南部では盛んではなかった」としている。ただし、熊楠のいた頃のジャクソンヴィルの中国人に関して、上記のように秘密結社と似た方向性が見られることは事実であろう。

コーエンは国勢調査などを基に、1880年にはフロリダ全土で18人でデューヴァルには1人だった中国人が、1886年にジャクソンヴィルだけで7人になったと割り出している¹⁵⁾。この7人は、すべて洗濯屋 laundry であり、この後も中国人は洗濯を職業にすることが多い。

実は、この時期の米国の国勢調査や住所録については、家系図の作成を目的にしたアンセストリー・コム Ancestry.com というサイトからほとんどのものをオンラインで見ることができる。このサイトで熊楠が滞在した1891～2年頃のジャクソンヴィルの住所録に見える中国人と思われる人物を抽出してリストにしたのが、資料3である。これによれば、1888年から1893年までの間に、30人の中国人らしい名前が見つかった。そのうち、熊楠がジャクソンヴィルに滞在した1891年と92年に記載されている名前はゴチックで示したもので、1891年が13人、92年が10人である。1891年の13人という数字は、熊楠が博徒^{きんし}鑑至……凡そ十五名」とした数とほぼ一致していて興味深く、これがその時の市中の中国人のだいたいの総数だったと考えてよいのかもしれない。

これらの人物は多くは Lee 姓を名乗っているが、おそらく白人から見た場合にもっとも呼びやすい中国名（李）であることから、そのように登録していると思われる。また、ほぼすべて洗濯屋を職業としているが、中心街のベイ通りでレストランをやっている Han Lee と Way Lee の二つの店は、熊楠の足取りを考える上では参考になるかもしれない。しかし、熊楠の日記に出てくる中国



図3 当時のベイ通り。中国人のレストランや、熊楠が江聖聡と写真を撮ったバーガー写真館などがあった。

人としては、この住所録ではっきりと特定できそうなものは、この後詳述する江聖聡のみである。おそらく広東語読みが多いと思われるこれらの名前を漢字に直せばどのようなになるのかは、今後の検討課題である。

さて、日記によれば、7月以降、キューバに渡航するまでに、熊楠は梅彬廼の他に、江聖聡、趙炎、楊牛などと仲良くなっている。7月30日には、ベイ通り71 1/2番地のバーガー写真館で和服と洋服の二枚の写真を撮ったが、中国人友人たちのためにまず和服の分ばかり4枚を配り、それからカルキンスや日本の友人たち宛てに15枚を郵送している。8月9日には、梅彬廼方に集まった「博徒」たちに酒を振る舞っているから、兄弟意識を大事にする中国人社会の食客として、ある程度認められていたと考えことができるだろう。

彼らの気風に影響されたのか、熊楠は「予フロリダ州に流寓し、到る処、支那人に寄食し、毎夜彼らが博奕する傍らで『水滸伝』を借覽してみずから娛しんだ」と『水滸伝』を読みふけている。日記にも、キューバから戻ってからは「梅彬方より水滸伝欠本十一冊受」(1892年1月20日)と、本格的に読み始めた跡が見られる。さらには、欠本に物足りなかったのか、「紐育支那人店より所購、西廂記六冊、水滸伝十二冊、三国志廿冊着」(5月13日)と、わざわざニューヨークから完本を取り寄せたりもしていた。

故国からやって来て米国に骨を埋めることになった移民労働者たちと、植物採集に訪れた学生という立場の違いこそあれ、ジャクソンヴィルは中国人たちと熊楠の双方にとっての梁山泊だったのである。

6 江聖聡との友情

こうした中国人たちの中で、熊楠がもっとも仲良くなったのが江聖聡である。日記には、1891年7月1日の条に「午支那人江聖聡方に飯、夜支那人梅彬廼方に臥す」と初めて登場する。その後もしばしば江聖聡の名前はあらわれ、熊楠がキューバに向かう8月17日には、「江聖聡に、書籍、標品入一箱あづける」と、一月半の間によほど信頼できる関係になっていたことがわかる。

そして、その五ヶ月後、キューバからジャクソンヴィルに戻ってきた熊楠を温かく迎えてくれたのは江聖聡であった。この日、午後8時に街に着いた熊楠は、まず趙炎のところに行くが、「趙炎を訪、甚冷遇也。土板上に臥す」(1892年1月9日)という扱いを受けた。しかし、次の日に江聖聡のところを訪れると、「江聖聡方に之く。大に厚遇さる」(1月10日)という歓待を受ける。そこで「今日より江方に宿る」ということになったのである¹⁶⁾。

この頃の友人宛の手紙の中で、熊楠は自分の状況について、「さて当地ではやや久しく支那公の棒組になり、八百屋を営業中なるが……」と描写している¹⁷⁾。また、南方熊楠記念館の資料の中には、地衣標本に付けたメモとして「此品は江聖聡とて余零落してフロリダにありし日、厄介してくれたる八百屋主人が一日持来り与へられしなり。Presented by Gong Tong」という記述がある¹⁸⁾。

しかし、江聖聡の人柄をもっともよく伝えていると思われるのは、後年の熊楠が書いた「履歴書」と呼ばれる自伝の中の次のような言葉である。

……ジャクソンヴィル市で支那人の牛肉店に寄食し、昼は少しく商売を手伝い、夜は顕微鏡を使って生物を研究す。その支那人おとなしき人にて、小生の学事を妨げざらんため毎夜不在となり、外泊し暁に帰り来たる¹⁹⁾。

日記にも、「今朝よりクロスミー（黒女。江の家の持主也）病に臥し、江外出のおり見世の方手なきにより、余全く見世番となる」（1892年3月30日）という記録があり、熊楠が江聖聡の店の店番をしていたことがわかる。この期間も植物学上の記述が多く、「夜は……生物を研究」というのも、その通りだったのであろう。ただし、顕微鏡については、6月21日付けの友人宛の手紙の中に「ご存知の顕微鏡も一番肝心のレンズを破ってしまい、ようやく毎朝菌を集むるのみ」と書いており、後半は使うことができなかったようである。

さて、この江聖聡の店については、1892年の住所録から所在を確かめることができる。資料3のリスト中に Tong Gong とあるのは、先ほどのメモにあったように江聖聡のことで、Gong は江の広東語読みと考えられるのである²⁰⁾。南方熊楠顕彰館資料には、他にも Gong Tong 名のメモが残されている²¹⁾。職業は groceries、つまり食糧雑貨店とあるから、熊楠が「八百屋」あるいは「牛肉店」と書いていることと符合する。住所は、300 W Church とあり、自宅で営業していたこともわかる。この 300 W Church つまり、西チャーチ通り 300 番地は中心部からは少しそれたあたりに位置し、現地で確認したところでは交差点の南西角にあたっていた。

この頃の町並みを知るための資料としては、1893年のジャクソンヴィル市全体の精密な鳥瞰図があるが、その中のこの住所の部分拡大したのが図4である。左右を通るのが西チャーチ通りで、斜めに上下に通っているのがジュリア通りである。西チャーチ通り300番地はこの交差点の左手前の角であるから、ここまでの考証が正しいとするならば、江聖聡の店があったのは、図4の中に見える街路樹に囲まれたひとときわ小さな家屋であったということになる²²⁾。江聖聡が熊楠の研究を妨げないために毎晩外泊して朝に帰ってきたという記述からは、相当に狭い家だったことがうかがわれるので、この図と合致することになる。

さらにこの図4を、その17年前の1876年に描かれた図5の鳥瞰図と比べると、短期間のうちにかなり街並みが変わっていることもうかがえる。おそらく、熊楠の頃には、この界隈には比較的新しい建物が多かった



図4 1893年のジャクソンヴィル鳥瞰地図に描かれた西チャーチ通り300番地（交差点左手前の家屋）。



図5 1876年のジャクソンヴィル鳥瞰図に描かれた西チャーチ通り300番地。(同上)



図6 現在の西チャーチ通り300番地にある建物。1901年の大火後のものと考えられる。上記鳥瞰図交差点の右上から左下を見たところ。

ということになるだろう。江聖聡の店と推測される300番地の建物については、建物の形と大きさがやや変わっていることからこの17年間の間に建て直されていたとも考えられるが、古い方のものもやはり平屋であるように見えることから、同じ建物である可能性の方が大きいと考えてよいのではないだろうか。いずれにせよ、航空写真のなかった時代に作られたこれらの鳥瞰図は、細部に関しては正確とは考えにくく、実際の江聖聡の店の姿は、図4を基にしながら、ある程度の幅を持って想像する他はないであろう。

もちろん、前述のように図4の鳥瞰図から8年後の1901年に起きた大火災によって、このあたりの建物は焦土と化しており、その後の街並みは一変しているはずである。現

在の西チャーチ通り300番地には六階建てのビル（図6）が建っており、休業中のホテルとなっている。

結局、1月に江聖聡の家に転がり込んでから、8月に英国に向けて船出するまで、熊楠はずっとこの場所にいたようである。別れに先立ち、8月19日にはベイ通りのバーガー写真館で写真（図6）を撮っている。熊楠の日記には「江は清国服、予は日本服にて写真とる」と記されている。8月22日に江は港まで熊楠を送りに来ており、9時に熊楠が乗船するのを見届けている。そして、翌日の午前4時に、船は熊楠にとっての中継点であるニューヨークに向けて出航する。

7 その後の江聖聡

さて、このように熊楠が友情をはぐくんだ中国人移民の江聖聡とはどのような人物で、熊楠と離れた後、どのような人生を送ったのであろうか。熊楠の書き残したメモによれば「広東省広州府新寧県土名湍芬山太洋義村 江世平之子」とあり、広州の生まれであったことがわかる。

熊楠は、1892年8月22日の日記に「江聖聡今日より閉店す」と記しているから、この時に江は、いったん店をたたんでいる。そしてその後、ロンドンで熊楠が受け取ったと思われる江聖聡からのメモには「Gong Tong, 27 Drayton St. Savannah, Ga. 若有書回将字無怪矣」とある。この住所にある Savannah Ga. つまりジョージア州サヴァンナは、ジャクソンヴィルから約200キロ北に位置しており、アメリカの感覚から言えばほぼ隣町と言える。おそらく、熊楠が去ってからまもなく、江聖聡はこのサヴァンナに移り住んだのであろう。結局、江聖聡は1894年にいたるまで、6通の手紙を熊楠に出している。

熊楠と江聖聡の接点はそのあたりでまったく切れることになるのだが、さらにその後の江聖聡の足取りを追うと、興味深い事実が浮かんできた。まず、前出のコーエンは『フロリダ・タイムズ・ユニオン』紙からジャクソンヴィルの中国人がらみの二つの事件を紹介している。まず、1900年に移民局から連邦法執行官宛に、キューバ及びプエルトリコからジャクソンヴィルに中国人が密入国しているという噂があり、捜査せよとの命令が下った。ただちに32名の中国人が逮捕され、1882年の中国移民の禁止以前に入国していたという証明を出せない場合には拘留するという事になった。結局、このうちの4名が証明書を提出できずに、国外追放処分を受けたというものである。

おそらくこうしたことから、中国人に対する取り締まりが強化されたのであろう。1901年12月31日には、ジュリア通り118のジョージ・ゴン George Gong の店で賭博をしていた11人の中国人が警察に逮捕されている。

このジョージ・ゴンは、1900年、1910年、1920年の3回の国勢調査に名前が載っているが、1910年のものには、George Tong Gong と記されている。また、それぞれの国勢調査の情報をつなぎ合わせると、この人物は1863年10月生まれ²³⁾で、1880年にアメリカに移民。1899年に、フロリダ生まれの17歳ほど年下(1880年頃生)の白人女性エマ Emma と結婚。ジョージ George (1903年頃生)、マミー Mammie (1908年頃生) という一男一女をもうけている。

これらの情報から推測して、このジョージ・ゴンこそ江聖聡である可能性が非常に高いと私には思われる。

まず、George Tong Gong という名前は、かつて Tong Gong であった中国人が、英語式の名前をつけたということで間違いないだろう。また、1863年という生年は熊楠よりも4歳年上ということになる。図7の写真の時期には、29歳だったはずで、これは見た目とぴたりと一致する。熊楠の日記によれば、1891年に梅彬廼の家でおこなわれ、江聖聡も参加していた賭博会は15人ほどが集まっており、11人が逮捕されたという1901年の事件とほぼ同じ規模のものと思われる。さらに、ジュリア通り118はかつて江聖聡の店のあったところから3ブロック南に行った場所である。

おそらく、江聖聡は1893年頃にサヴァンナに移り住み、そこでエマと結婚したのではないだろうか。ジョージア州は中国人と白人の結婚を許していたからである。そして、ジャクソンヴィルに戻り、かつての中国人コミュニティの中で暮らしていた、ということになる。賭博で逮捕されたというものの、国勢調査からうかがえるその後の生活は順調で、1910年には家族とともに、ジュリア通り118で中国茶と雑貨屋、また1920年には同じ住所でレストランを経営していたことがわかる。そして、フロリダ死亡目録によれば、1939年にデューヴァル(ジャクソンヴィル)で76歳で死去。妻のエマ・R・ゴン Emma R Gong は長生きして、1972年3月3日に92歳で同地で死去している。

ジョージ・ゴンが江聖聡であるという前提に立つと、一男一女をもうけたことや、70代の半ばまで生きたこと、また自分よりかなり若い妻をもらったこと(熊楠の場合は12歳年下)など、後半生でも熊楠との共通点が見られて興味深いところである。熊楠が滞在した時期は、ちょうどアメリカにおける中国人移民の波が押しとどめられ、日本人移民がさかんになる前の端境期にあたる。そうした中で、同じ東洋人として異邦に生きる友人を見つけ得たことは、熊楠にとって幸運なことであつたと言えるだろう。それは、ロンドンでの孫文との出会いや、世界の文化を比較論的に見ていく熊楠の学問の展開につながっていく貴重な体験であつたはずである。



図7 1892年6月19日に渡英をひかえた熊楠(左)がバーガード写真館で江聖聡(右)とともに撮った写真

注

- 1) カルキンスの書簡のレターヘッドから。
- 2) 『南方熊楠を知る事典』（講談社現代新書、1993年）中の萩原博光「カルキンス」の項を参照。
- 3) 『南方熊楠全集』（平凡社、1970—75年）7巻9頁
- 4) この「ウェストアヴェニュー第四百七番」は区画が変ったためか現在の地図には見あらず、所在不明である。
- 5) S. Paul Brown, *Book of Jacksonville, a history*, 1895, pp.117-8
- 6) *A Souvenir of Jacksonville*, 1888
- 7) T. Frederick Davis, *History of Jacksonville, Florida and Vicinity, 1513 to 1924*, 1925, p193横
- 8) 和歌山県白浜町の南方熊楠記念館には、熊楠がこの頃採集したと思われるサボテンの標本がいくつか展示されている。
- 9) 『南方熊楠全集』7巻103頁
- 10) 『南方熊楠全集』7巻91頁
- 11) 『南方熊楠全集』7巻10頁
- 12) 松居竜五「南方熊楠と東アジア情勢——『佳人之奇遇』、金玉均、広東人博徒、そして孫文」（『孫文と南方熊楠』2007）を参照。
- 13) [http://en.wikipedia.org/wiki/Tong_\(organization\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Tong_(organization)), 2008年10月1日確認。
- 14) Cohen, Kathleen Ann Francis, *Immigrant Jacksonville: a profile of immigrant groups in Jacksonville, Florida, 1890-1920*, 1986, pp.91-92
- 15) Cohen, pp.96
- 16) 梅彬廼については、5月27日に「梅彬廼帰り来る」という記述があり、この時市内にいなかった可能性もある。
- 17) 『南方熊楠全集』7巻118頁
- 18) 『南方熊楠を知る事典』235頁の中瀬喜陽「江聖聡」の項より。
- 19) 『南方熊楠全集』7巻9頁
- 20) Tong は前述の「堂」のことである可能性もあるが不詳。
- 21) 南方熊楠顕彰館資料【関連0006】
- 22) もちろん、現在は当時と番地が変わっている可能性、またこの鳥瞰図の信頼性など、今後この場所の確定のために検証すべきことは残されている。余談であるが、2008年10月現在、この周辺の様子は google street view でオンライン上でも見ることができる。
- 23) 1900年の国勢調査による。1910年版では1860年頃、1920年版では1861年頃というあいまいな年が記録されているが、これは本人のきちんとした申告によっていない可能性が高く、誕生月を記した1900年の記録がもっとも信頼できると判断した。

資料1 カルキンスから南方熊楠への来簡

[来簡0020]（以下、[] 内は南方熊楠顕彰館の資料番号）

W.W. CALKINS

ATTORNEY AT LAW

PENSIONS AND GOVERNMENT CLAIMS A SPECIALTY 【以上印刷】

147 California Avenue

Chicago, 4/21/1891

K. Minakata,

My dear sir,

By your letter just received I am pained to know of your accident, and the consequent disarrangement of your plans. I sincerely hope you are now quite recovered and will be able to resume your travels. I was greatly disappointed not to see you while I was in Florida, but, you must be sure to see me here on your way. When you arrive take the Madison Street cable car line to California Avenue where you get off, and walk two blocks south where you will find me, or if I am out, my wife (who will be home on next Thursday.) will welcome you. My wife is now in Tennessee much improved in health, and is anxious to get home

Wednesday morning. This is a beautiful spring morning and everything taking on new life. I hope it will help you to get well. Today my wife starts for home. I have not yet received the package you speak of. I fully appreciate your returning to me those paintings of Fungi. I shall be able to add a few new species of Lichens to your collection when you come, as a token of my esteem. Be sure to come and that you will be welcome by us.

Very Sincerely yrs
W.W. Calkins

[来簡0021]

10/9. 91. My dear K. Minakata,

Yours 30th. received and noted. The specimens therein are new to me. I have just written Dr. Nylander, enclosing *one species* that from the *cereus stems*, and have informed him that you collected it, also telling him you will in due time visit Paris and call on him. Thus as you see, preparing him and you for the meeting. When you get back to U.S. please keep me fully informed as to your Post Office addresses, as you change and I can thus keep you informed of my movements here, and also send you names, &c. For your expressions of friendship for myself, I am glad and assure you of their full return in kind. Now cannot you *possibly come here*, as my guest. My wife and myself will make you at home and happy, be assured of it. By all means do come. In many other ways it will help you by coming.

Very Sincerely your friend
W.W. Calkins

Yes, it will save all I can for you of Lichens.

[来簡0022]

Chattanooga, Jan 22.

My dear M. Yours with enclosure, also one with the Jap. Lichens, received. Thanks. I will look over the lot soon: We soon have snow here and rain the rest of the time. So I cannot do much. You need not hurry about the balance. 10st Feb. will do. How is your health? Had I not better send you the 140 species I have here? By Ex. not cost much. Would as soon do so. Let me know. Your boxes not here yet. May be today.

Sincerely Yours
W.W.C.

[来簡0023]

Monday 3/7. 12 Oct.

My dear Mr. K.

I have put up 52 species this morning and will send them via Ex. this P.M. These are about 30 *Sencra*. We will call the coll. 40 species. There are several which you have not had before. Perhaps as *Ephebe*. very rarely formed in fruit, also *Leptogium myochroum*. Your *No. 36* from Cuba is *Gypethelium pyresenboides*. *No. 97*. Cuba new sp. Your (a) from Cuba is unknown to me. But your (b) Cuba, on rock is *Esedocarfon niinisises*, Schacres. I must send two or three to Nylander.

W.W.C.
In chatt. Post Box 140

[来簡0024]

Chatt. Mch 18. 1892

My dear Sir,

Your favor received. I will reply ... at length soon. We now have very cold weather & snow here. I sincerely

trust that you will get well when the warm weather comes and it must come there now very shortly. The specimen you sent reached & from Cuba calcicolous is *Erebocae fou* miniature.

Very truly yours,
C.

[来簡0025]

Chatt. Apr. 1892.

My dear Mr. M, I have just heard from Dr. N. who calls your *No. 2*. sent to me by you *Gyalecta cubana*, Nyl. *new species*. I wrote him that you were the discoverer and to give you due credit. We leave on May 2. for

home. I trust you are recovered now. Please write me.

Very Sincerely Yrs.
W.W.C.

[来簡0026]

W.W. CALKINS,

LAW AND REAL ESTATE OFFICE,

OPERA HOUSE BUILDING, Cor. Clark and Washington Sts., ROOM 913 【以上印刷】

Chicago, March 21, 1893

K. Minakata

Dear Friend

Yours of March 3rd noted. In regard to *Arthonia* by Willey I think I can get a copy for you. It costs \$ 1.50. I will take Leighton's work that you speak of and send you the difference, when received. Send it by *mail*, directed to this office. I send you herein *Heppia viesseens*, var *rugosa*, Nyl, the best I now have. I found but little of it and knowing it was rare, took much time to get all I could. The *Heppia* you found in J.ville on *sandy street* is *Heppia desfieanxii*, Turk. The calciferous Lichen from Cuba, with small salmon colored apothecia, *numbered* by you #2 is *Gyalecta cubana*, Nyl. and very fine. The other I cannot find now. If I do, I will report, when you send me specimens. You do not need, (so I think,) to name contents of envelope on outside, must cover by letter postage any way and sealed. I am glad that you are so well situated as you are for study and pleasure of seeing the great city of London. We still have cold winter here. Snow and ice on our streets, and have not been without these for over 3 months, which makes me long for the sunny south, Tenn. or Florida. I hope that the enclosed *Heppia* will not be all crushed in the mail.

Very Sincerely Yours
Direct to W.W. Calkins
#913, Opera House Building,
Chicago, Ills, USA
is all necessary

“Contamination of Lichens collected by K. Minakata in key west etc.” と題されたリスト一枚封入。【略】

[書簡0003]

August 25 1891

W.W.Calkins, Esq.

147 California Ave, Chicago, Ill.

My dear sir,

I have arrived here in safety and am as usual collecting in bushes & on shores. Lichens are so abundant &

variegated that I have collected about 60 different entries of them during 2-3 hours rambles, besides several fungi & many insects. It is found, at least to such a novice as myself, very troublesome task to arrange these according to their apparent differences, to proper order. Indeed I must adjourn this, in my own part, till I get to Europe. However, when I finish my southern journey I will send you in a box, all or most species, which I can find as distinct, & if possible you will please arrange them & keep their notes for me. This is rather convenient way, though it is very troublesome to you. As the herald of my gains, I herewith enclose 5 sps. which you will please find & put down names in order of the numbers affixed to them by myself. As I have no fixed lodging, you will please detain from writing to me.

Yours very respectfully,

K. Minakata

Key West, Fla.

P.S. The specimens sent herewith, all but no.20 was on raw Euphorbiaceous tree; no.20 on fallen withered twigs.

資料2 カルキンス関連事項

年月日	発信者（記述者）	資料・記録	記述内容	出典
1890.12.14	南方熊楠		「夜遅く迄前日カルキンス氏より所着の菌耳類分類目録を作る」	日記
1891. 1.16(消印)	カルキンス	[来簡0019]	封筒のみ	顕彰館資料
1891. 1.31	カルキンス	[来簡0019]のこ とと推定	「チカゴ府コロネル・カルキンス氏より地衣科六十種一箱到着。」	日記
1891. 3. 9	南方熊楠		「発信……カルキンス氏（これらは明後日出す）」	日記
1891. 4.21	カルキンス	[来簡0020]	【要約】 フロリダに来られなくて残念。フロリダに行く途中、ぜひシカゴに立ち寄ってほしい。	顕彰館資料
1891. 5. 5	南方熊楠		「チカゴ府コロネル・カルキンスへも出す」	日記
1891. 5.18	カルキンス		「チカゴ府カルキンス氏より状一受。カルキンス氏より当地ナショナルバンクの頭取に承介状を得。」	日記
1891. 5.20	南方熊楠		「発信……カルキンス状一」	日記
1891. 6. 2	カルキンス		「コロネルカルキンス氏より借る所のNylander's Lichens Japoniae（ニイランデル氏初てカルキンスにおくれる本）着、受取。」	日記
1891. 6. 5	カルキンス		「Received letters from Calkins…」	日記
1891. 6.12	カルキンス		「来信……状一カルキンス」	日記
1891. 7.22	南方熊楠		「書状を……テーカルキンス、出す。」	日記
1891. 8. 5	南方熊楠		「〔自分の写真を〕カルキンス氏へ二枚おくる。」	日記
1891. 8.17	カルキンス		「カルキンス氏より来状、写真おくれる礼状也。」	日記
1891. 8.25	南方熊楠	[書簡0003]	【要約】 キーウェストでの地衣類採集の報告の下書き。森や海岸で地衣類を採集しています。種類が多すぎてたいへん。	顕彰館資料
1891. 9.17	南方熊楠		「……カルキンス氏へも各一書出す。」	日記
1891. 9.30	カルキンス		「コロネルカルキンス……各書面一つ、来着。」	日記
1891.10. 1	南方熊楠		「……カルキンス氏へ状一出す。」	日記
1891.10. 9	カルキンス	[来簡0021]	【要約】 標本受け取った。私の知らないものも多い。ニランデル博士にサボテンの茎から取ったものを送った。ぜひ私を訪ねて来てほしい。	顕彰館資料
1891.10.14		[来簡0021]のこ とと推定	「コロネルカルキンスより来信。……カルキンス氏、予がキイウエストにて獲たる仙人掌樹皮に附せる地衣を新種と見做し、巴里のニイランデル氏へ贈れりと申越す。」	日記
1891.12. 9	南方熊楠		「コロネルカルキンスへ状一書留。」	日記
1891.12.10	南方熊楠		「コロネルカルキンスへ状一出。」	日記
1891.12.17	カルキンス		「テーカルキンス氏」	日記
1891.12.21	カルキンス		「コロネルカルキンス氏より金子着。」	日記

1891.12.23	カルキンス		「来信テーカルキンス氏 氏数週間前よりテンネッシー州チャタヌーガに来住、五月迄すむとのこと、余の為新種地衣百三十種を調べくれたりといふ。」	日記
1892. 1.19	南方熊楠		「羽山蕃次郎子夏七月二十一日出せし状一本及び地衣（日高郡の）二十六品着、内十品カルキンス氏へ送る。余二十弗返却す。」	日記
1892. 1.22	南方熊楠		「カルキンス氏へ地衣十四品送る。」	日記
1892. 1.22	カルキンス	[来簡0022]	【要約】あなたからの小包が届きました。日本の地衣も。お金の残額は急いで返さなくてもよいです。	顕彰館資料
1892. 2.11	カルキンス		カルキンスより地衣百五十種斗、目録共着。一昨年受る所より第三番めの集彙也。目録数四百三十二に及べり。	日記
1892. 2.23	南方熊楠		カルキンスへ写真一枚送る。これは同氏三十年前の師におくる也。	日記
1892. 3. 7	カルキンス	[来簡0023]	【要約】地衣類を同定。Ephebe pubescens あり。キューバからのものはわからないのでニランデルに送る。	顕彰館資料
1892. 3.12		[来簡0023]と関連	「カルキンスより地衣数十種着。内に Ephebe pubescens Fr. First found by Calkins in U.S. in fruit.」	日記
1892. 3.18	カルキンス	[来簡0024]	【要約】キューバから送られた標本について。	顕彰館資料
1892. 4.18	カルキンス	[来簡0025]	【要約】熊楠がキューバで見つけた地衣がニランデルによって新種と同定され、Gyalecta cubana と名付けられたことを伝えている。	顕彰館資料
1892. 4.30		[来簡0024]および[来簡0025]のことと推定	「Letters from Col. Calkins reports my Lichens Cubanei. No.2 Gyalecta Cubana Nyl. Nov. sp. No.97 Trypethelium Sprengelii Ach. Both determined by Dr. Nylander.」	日記
1892.11.24	カルキンス		「n.7 Lecanaetis floridensis Nyl. n.12 Stigmatidium negro-cinctulum Nyl. 此二種予キイウエストにてとる所新種也。米国カルキンス氏より通知さる。」	日記
1893. 1.24	南方熊楠		「Send to W. W. Calkins the following lichens. 1. On Magnolia bark, Fla. 2. Fuji. On trees, Alecatoria 3. Do.Do. Stouter-white 4. クク Brown 5. Pilophoron sp., Fuji 6. Stereocaulon sp., Fuji 7. On bark of Pines, yellow, Kii 8. On Imprica cerifera, Fla. 9. Cladonia squamosa, macrophylla」	日記
1893. 2.28	カルキンス		「A letter fr. W.W.Calkins, enclosing 2 Pertusarias.」	日記
1893. 3.21	カルキンス	[来簡0026]	【要約】Leighton の書を所望。ギアレクタ・クバーナのことなど。	顕彰館資料

1893. 4. 3		[来簡0026]のことと推定	「カルキンス氏より、昨冬テンネッシー州にて同氏発見の <i>Heppia virens</i> v. <i>rugosa</i> を贈らる。」	日記
1893. 4.10	南方熊楠		「Send Leighton's Flora to Mr.Calkins. This was ordered by him a month ago.」	日記
1893. 5.17	カルキンス		「米国カルキンス氏よりウキレー氏アーソニア譜、タツカルマン氏ジェネラ・リケヌム着。」	日記
1893. 9.24	南方熊楠		「発信、カルキンス氏。」	日記
1893.10.24	南方熊楠		「カルキンス氏へ地衣十四品送る。状一出、二弗おく。これは地衣の郵送賃として。」	日記
1893.11.20	カルキンス		「カルキンス氏より地衣四種（何れも新発見）を送らる。」	日記
1894. 5.26	南方熊楠		「カルキンス氏より数年来得たる地衣を閲し目録を新調す。……」	日記
1902. 5.17	南方熊楠		「夜二時迄地衣（前年カルキンスより得しもの）調査す。不足廿種あり。大にこまる。」	日記
1902. 5.18	南方熊楠		「午後より地衣しらべにかゝる。前年カルキンスより得る所、地衣四百三十二点附加九点合四百四十一、内四品不足なれば現存四百三十七点也。」	日記

資料3 1888年から1893年のジャクソンヴィルの住所録に見られる中国人らしき名前

氏名	住所	職業	記載年	備考
Chew Seen		laundry	1888	
Yee Hop	27 Hogan	laundry	1888	
Gee Lee	204 Bay	laundry	1888	
Hing Chung	30 Laura	laundry	1888	
Sam Wo		gardener	1888	
Wong Lee		laundryman	1888	
Duc Chung	24 Cedar	Chinese laundry	1888～90	
Sing Chong	54 W Forsyth	laundry	1888～89	
Quong Wo	109 W Bay	laundry	1889	
Lucretia Lee		laundress / cook	1890	女性名、妻か？
Quong Wing	59 Main	laundry	1889～90	
Wau Chong	Cedar n Adams		1889	
Han Lee	107 W Bay	restaurant	1888～91	
Hop Yeck	22 Laura / 24 Laura	laundry	1888～91	
Toe(Joe) Lee	42 E Forsyth	laundry	1888～92	
Yit Sing	29 Newnan	laundry	1888～93	
Way Lee	20 E Bay	restaurant	1889～92	
Wo Kee	21 Main	laundry	1889～93	江聖聡の手紙に記述あり
Sam Lee	W Adams n Julia	laundry	1891	
Wah Ling	21 Main	laundry	1891	
Heap Wan	109 W Beaver	laundry	1891	
Quong Sing	101 Main	laundry	1891	
Sam Wo	33 Hogan & 35 Ocean	laundry / Chinese laundry	1891～93	
Chong Yee	138 Main	laundry	1891～92	
Sam Lee	301 Clay	laundry	1891～93	江聖聡の手紙に記述あり
Tong Gong	300 W Church	groceries	1892	江聖聡と推定
Kong Wah	24 Cedar	laundry / Chinese laundry	1892～93	
Soon Lee		laundry	1892～93	
Tom Lee	506 Bridge	Chinese laundry	1893	
Wong Tom Lee	502 Bridge	laundry	1893	
Charlie Lee	140 Main	Chinese laundry	1893	